

# 会報

第 2 号  
1994. 10. 20  
新潟大学  
理学部同窓会

## 躍進する 新潟大学理学部



新潟大学キャンパス（建物は理学部校舎）

### 会報第二号の発行にあたって



会長 渡辺 昌 吾  
(化学科第一回卒業)

### 同窓会と理学部の 発展を折る

名誉会長 池田 清 美

残暑お見舞い申し上げます。今年の夏は近年にない記録破りの酷暑が続きましたが、同窓生の皆さんには益々ご健勝でご活躍のことと拝察致します。

さて、会報第二号ができましたのでお届け致します。

新潟大学では、今年度から教養部の廃止、理学部に環境科学科を増設するなど大規模な改組が実施されました。それらの様子を同窓の皆さんにお知らせしたほうがよいのではということで、今回会報の発行ということになった次第であります。詳しくは「理学部の近況」をご覧ください。

さらに、数年前になりますが、国際交流基金設立のための募金が行われ、同窓会の皆さんのご協力をいただきましたが、その後国際交流の活動状況について報告されていないので併せてお知らせすることにいたしました。

平成三年六月二十七日基金設置

が行われて、以降事業が実施されております。おもな事業内容を列挙しますと

#### 1、外国人研究者の招聘事業

(1) 外国からの招聘

(2) 来日中のものの招聘

#### 2、外国人留学生への奨学事業

(1) 派遣外国人留学生

(2) 私費外国人留学生

#### 3、国際交流に必要な事業

(1) 国際会議等の開催

(2) 渉外事業

(3) ①学長への公式訪問

②職員の短期海外派遣

③協定締結大学との相互交流

また、この基金とは別になりますが、募金活動の過程で、地域社会の国際理解を増進する事業が必要であるということになり、昭和六十三年十一月、新潟県や新潟市の国際交流協会から補助金を得て新潟大学国際交流活動促進会が発足し、爾来種々の活動を行っております。



満四十五年を迎えた理学部は、創立以来の大きな組織改革を行っています。一つは教養部廃止に伴う理学部改組で、他は大学院の改組であります。前者は本年度から後者は来年度からの予定ですが、これらは二十一世紀を展望して、科学・技術・発展をにう人材を養成する教育研究機関として理学部を発展させようとするものです。

理学部改組では新たに自然環境科学科が発足し、他の五学科を含め教養部教員も加わって組替えられました。教員数も七十一人から九十八人と増加しました。大学院は、理・工・農三研究科と自然科学研究科が、一つの自然系の大学院になるもので、理学部はその基礎部門を受け持ちます。

同窓会の一層の御発展を願うと共に、理学部の今後の発展に同窓生の皆様方の御理解と御協力をお願い申し上げます。

# インディアン

## 小屋から……

新潟大学名誉教授  
(生物学科) 吉田 吉男



「インディアン小屋が並んでいるだけ、これが日本の国立大学？」特に観光ポイントとでない新潟だがそこにヨシオがいるから……とわざわざ来てくれた旧友が、ヨシオの大学・研究施設はどんなかと来て見たら何とまあ……全く率直な感想であった。それにしてもよくこんな所で一応の研究成果もだしてそれなりに教育も！普通の顕微鏡一台以外ロクに科学機器らしいものどてない研究室で妙な感心(?)の声を洩らしてくれた。西大畑旧校舍時代の苦笑の憶い出である。

戦後の学制改革で大学の看板だけは掛けたものの旧制高校の敷地建物そのままに、安普請のつけ足しやプレハブ校舎を並べて急場をしのいだだけ、実験台の赤サビまじりの水道水、特に便所の惨状は文字通りに目と鼻をおおわねばならない後進社会国辱の隠すこともできない現実であった。

それから数年、大学当局も文部省もようやく新潟大学統合移転整備計画を実現に乗り出そうとしたが、時運悪く全国を吹き荒れた学生紛争の嵐に巻きこまれた。その頃訪日してくれた友も、ヘルメットの異様な学生集団が無秩序な学内を横行する雰囲気は何の知性の意義があるのか?と、只答えに窮するばかりの無責任暴力的異常時態もあった。大学臨時規制時限措置法成立は海外にも伝わり、もしユーの大学が廃校になったら身元引受人になるから亡命も……とまで言ってきたくれた航空便を胸に

秘めて理学部内では学生紛争に對抗した。当局側反動教官と学生に棒叩きされたのも既に昔となった。新校舎に移転し少しは大学らしくなり始めた頃来日目のG教授の言「新校舎でも校地内は乱雑放題どこにも外国人の姿が見えない、それに教授陣に女性が居ない……経済成長発展の日本と言っても大学がまだこれでは? 社会成熟度の指標はまず大学を見るべし」との適切な評であった。

やがて創設以来約半世紀、校地環境整備事業が進行し今や画期的制度改革も緒に、留学生も年々急

増している。我理学部にも女性教授が当然の、信頼の廿一世紀を……。

## 理学部の 始めの頃の思い出

新潟大学名誉教授  
(物理学科) 野本 森萬



## 物理学の 始めの頃の思い出

私は昭和二十七年、新制大学が出来て四年目の四月に、東北大学より物理学科に赴任した。当時の理学部は西大畑町の角、今の教育学部附属小学校の所にあつて、旧制新潟高等学校の古い校舎が使われていた。木造で正面の建物は古い二階建、その一階に学部長室、事務室等、二階の中央が会議室、両翼に数学科と地質鉱物学科の部屋があつた。その他の学科、物理、化学、生物学科等の部屋は、木造一階で正面の建物と廊下でつながり、後方のやや新しい建物であつた。学部長は化学科の松井正夫先

生。物理学科では、田中務先生(東大名誉教授)、彦坂忠義先生、石田田人、横田伊佐秋、宮谷信也、斎藤文一、瀬野忠男(技師)の皆さん計七名で、そこに私が助教として加わり、原子核物理学専門としては私一人であつた。他の学科の事は詳しくはないが、どの学科も似た人数ではなかつたかと思う。人数が少ないだけに、大変和やかで、昼には皆が一部屋に集まつて食事を共にした。他の学科もそんな風であつたと聞いている。教授会は正面二階の会議室で行なわれたが、全員集まっても三十名程なので、互に良く知り合つていた。物理学科では、最長老の田中先生の御希望で、先生方一緒に春や秋、津川や良寛遺跡などへよくハイキングに出かけたものです。学生も多くなかつたので、皆の様子がよく分り、ゼミなども大変アツトホームの感じに出来た。

その頃昭和三十五年、私は米国フロリダ州立大学より招きを受け、二年間行く事になった。米国では車の免許を持たないと困るということで、練習を始めたが、それも理学部敷地内で、学部の車を使わせてもらつて練習した。そんな点、学部も誠に寛容で、有志と共に暗くなるまで練習した事など懐しく思い出す。又その当時、理学部で

は留学第一号ということで、出発の際には学部長初め、大勢の方々が見送つて下さった事等、今ではとても考えられない事で感激した。二年間の米国滞在に続いて半年余り、オランダ、アムステルダム原子核研究所に参つたが、その後の帰国の折には皆さんへの土産を探すのに苦労した。帰国してから車の免許を日本の免許に書き変える時、係員から、アメリカの車は大きかつただろうから、普通車と大型車と両方の免許を上げようと言われたのには驚いた。まさか大型バスやトラックを運転する事もあるまいと思ひもたらなかつたが、後から大型ももらつておいた方が良かったかと思つた。当時の役所は大様と言うか、今と比べて誠に今昔の感がある。(次頁へ)

## 弔 河野伊三郎先生



平成六年四月十六日ご逝去。数学科開設の昭和二十四年から昭和三十三年まで専任教授としてご勤務。専門は解析学。謹しんでご冥福をお祈りいたします。

このあと、五十嵐の今の建物への移転、学園紛争のこと等、多くの思い出があるが、スペースの関係でこれにて止める。



むかし卒業した人たちが学んだ西大畑町の理学部校舎は、全部取り壊されて建物は跡形もない。周囲は新しい建物がいくつか目につく程度の変りようだが、敷地はそのままである。

その一角、昔玄関のあったあたりに、新潟高等学校跡の石碑が同校同窓会六花会によって建てられている。旧六華寮の跡には十余年前に教育学部附属養護学校ができた。海岸寄り人文学部の跡には、教育学部附属新潟中学校、同小学校在が二年ほど前に引越してきた。そして旧制新潟高校の古い校舎があったあたりが両校のグラウンドになり(写真)、目下整備工事進行中である。北側の一面には三十年くらい前から、大学の教職員アパートがあり、最近増築(棟)された。このあたりからはじまる海岸

の保安林内にはきれいな歩道ができ、海岸線に沿って新潟島(旧新潟市)を一周する自転車と遊歩の専用道路につながっている。

理学部があったことは、人の記憶にしか残らない。(遠藤昭一記)



### 理学部の近況

理学部の近況については、前回の創刊号に記しましたので、その後の理学部の改革状況について述べます。

まず、理学部の改組については、平成五年度に教養部の廃止がきまり、それともない今年度から教養部自然系教員二十名が理学部に分属され、同時に既存学科の改革

及び総合学科として自然環境科学科を新設しました。これにより、理学部は数学科・物理学科・化学科・地質科学科(従来の地質鉱物学科)・自然環境科学科の六学科(学生定員二〇五名、教員数九十六名)で構成されることになり、而も学科内も従来の小講座制から大講座制に変革され、各学科は独自の教育システムのもとで、新しい時代に対応できるよう、基礎的で、而も国際的な教育と研究ができるようになっていきます。

更に、最近の学問の進歩、社会の発展に対応すべく自然系大学院の改革が急速に進んでいます。即ち、現在の大学院理学、工学及び農学研究科を総合し、前期(修士)課程と後期(博士)課程をもつ新しい総合大学院自然科学研究科に大変革するものです。この計画では後期(博士)課程に情報関係の専攻を新設して、これまでの四専攻から五専攻に改め、又前期(修士)課程には夫々特色をもった九専攻を設けています。前期二年、後期三年の五年間の一貫した教育・研究体制となっており、研究・教育の高度化、総合化、国際化に対応できるようになっています。

### リレー 会員たより 脱サラのころの思い出

(株)キタック代表取締役  
中山 輝也  
(地鉱八回 昭昭和35年卒)

昭和四十八年正月休み家で寝そべりながら、ふと四年前に技術士試験に合格していることが頭に浮かんだ。「このまま公務員生活を続けるのも人生ならば、三十五歳の若さを利用し、身につけた地質の技術を生かすのも人生ではないか」などと小なまいきな考えも浮かび、退職を決意した。以後、「飛ぶ鳥あつとを」との心境であるがなんとなく職場での疎外感を味わった。

設立時のスタッフは理学部へ行き、青木滋教授、吉村尚久教授にお願いし、学生二名の採用を決め、その後、Uターン組が次々入社。創業日、ガランとした木造の事務所に陽ざしがさし込む。まぶしい春の陽ざしをあげればあびるほど、無縁になって、将来への不安を思うと落ち着かない気持ちでいた。まもなく、ささやかだが受注開始。かつての先輩同僚の応援であり、感謝の気持ちでいっぱいであった。オイルショックの後、仕事量



(学内幹事)

の減少とともに、新参者への風当たりが強く、それが中傷となって現われ、根も葉もないうわさを打ち消すために徒ら時間を費やすこともあった。「特徴のある技術力の発輝」に心掛けて、頑張ったつもりではあるが...。業務の拡大で新潟市平島に社屋新築。さらに倍の面積へと増築したが、それも手狭。県庁脇に移転計画中である。創業まもなく、中国で技術協力、それが縁で平成二年には合弁会社を設立。国内でも、東北、関東方面に営業展開。また、転換社債を引き受けてもらうことも出来た。今後は、業界そのもののリーディングカンパニーをめざし、業を通じて一層の社会貢献をめざしたい。



平成二年合弁会社の開印を終つて。周興武黒電江省水利設計院長と握手。右端茅原一也名譽教授(当社最高技術顧問)

# 学位記

## 一六七名に授与

○学部卒業式

平成五年度卒業式が、三月二十三日午後一時から、新潟市体育館において挙行された。理学部卒業生は一六七名で、武藤学長から代表者に学位記が授与された。(数学科三十六名、物理学科四十名、化学科四十四名、生物学科三十一名、地質鉱物学科十六名)

○大学院(修士)課程学位記授与式  
理学研究科五十一名の授与式が三月二十二日に大学会館で行われ

た。(数学十二名、物理学十三名、化学十名、生物十一名、地質鉱物五名)

○大学院(博士)課程

学位記授与式が三月二十二日大学会館で挙行された。

博士(学術)

課程十名、論文提出三名

博士(理学)

課程十一名、論文提出一名

### 退官された先生

伊藤良夫先生(化学科)



勤務期間 昭和二十九年二月、平成六年三月。大学院自然科学研究科(博士課程)の創立にかわり、また最近の組織改革にも尽力され、同研究科物質科学専攻長(平成五年、同六年)も勤められた。

新潟大学名誉教授(平成六年四月)

専門・業績 物理化学、特に高分子液体のレオロジー関係。本年十月新潟工科大学教授就任予定。

### 岩沢久彰先生(生物学科)

勤務期間 昭和二十七年四月、平成六年三月。この期間中、理学部附属佐渡臨海実験所(昭和三十三年、昭和三十七年)、教養部(昭和三十三年、昭和四十二年)、佐渡臨海実験所々長(昭和五十五年、昭和六十一年)を歴任。

新潟大学名誉教授(平成六年四月)

専門・業績 両生類の性現象に関する発生・内分泌学的研究を中心に、両生類の生活史、形態分類。

### 同窓会活動

#### 首都圏同窓会

七月九日第九回理学部首都圏同窓会(相馬研吾会長、生物28年卒)を工学院大学で開催しました。今回は各学科出身者に仕事に関連したテーマの講演を依頼しましたが好評のようでした。新潟から出席された理学部同窓会長の渡辺昌吾さんの挨拶、生物学科の名誉教授・吉田吉男先生の講演と会は大いに盛り上がりました。

例えば二年がかりの準備の後、昭和六十一年六月二十七日に学士会館で第一回同窓会が開催された時は同窓会の将来が心配されましたが、なんとか順調にきました。次回会長の牧山さん(地鉱33年卒)は節目となる第十回同窓会をより盛大にしたいと張り切っています。

### 同窓会名簿完成

#### 千葉市 加藤義雄記

理学学科では、一九八二年に卒業生名簿を刊行して以来十余年ぶりに一九九三年版をまとめた。今後は他学科とも同じ印刷所で同一形式でというモデルになった。四十一回までの学部卒業生は千名

を超え、百ページをこえる厚さになった。理学部同窓会統一を機に、学部同窓会名簿として五学科をまとめる意見もあるので、物理学科の人のみ送金用紙にアンケートを求めたところ、合本賛成が回答三四三名中二一九名(六四%)と出た。大学創設五十周年の一九九九年頃までに結論を出さなければならぬ。

### お知らせ(事務局)

#### 「題字」

創刊号でもお知らせいたしました。が、「会報」の文字は元学長津田米粒先生にお願いしたものです。「各科の事務局の連絡先」

数学科については、

千九五一新潟市学校町通二番町

新潟中央高等学校内 高橋芳延

物理・化学・生物学科については、

理学部内各科同窓会幹事宛て

とし、地質鉱物学科については、

積雪地域災害研究センター内

高浜信行宛

新潟大学理学部所在地

千九五〇―一二二

新潟市五十嵐二の町八〇五〇

「住所・資料提供について」

住所・勤務先等掲載事項の変更

があった場合、速やかに各事務

局へお知らせください。